

## 研究ノート

## 京都看病婦学校同窓会機関誌の発刊と記述内容

— 『おとづれ』 第1巻1号～第2巻10号 (1901～1911年) から —

岡山 寧子

同志社女子大学・看護学部看護学科・教授

The Journal of Kyoto Training School for Nurses Alumni  
Association, 'Otozure' Vol.1. No.1-Vol.2. No.10 (1901-1911)

Yasuko Okayama

Department of Childhood Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

## はじめに

1886(明治19)年の秋、同志社の創立者新島襄により設立された同志社病院での診療と京都看病婦学校(以下、看病婦学校)での看護教育が開始された。看病婦学校が正式に京都府から設置認可を受けたのは翌年の8月、その次の年には初めての卒業生4名を送り出した。開始から約10年後の1897(明治30)年、同志社は、病院と看病婦学校の管理を当時同志社病院産科医の佐伯理一郎(1862-1953年：以下、佐伯)に委ねた。佐伯は、実質的に病院・看病婦学校の運営をすすめ、併せて京都産院や佐伯病院、京都産婆学校を開設し、キリスト教に基づいた医療・看護教育に生涯を捧げた人物である(寺崎、2002・2003)。1906(明治39)年には、事実上同志社病院は閉鎖され、看病婦学校は佐伯病院内に移転、同志社の手を離れた。その後約50年間、1951(昭和26)年にその歴史を閉じるまで、京都看病婦学校の名前は受け継がれ、卒業生は約1000人になる(遠藤・山根、1984)。

筆者は、今までに看病婦学校の諸規則、京都

看病婦学校50年史(1936年)、初代の看病婦学校監督者であったL. リチャーズ(Melinda Ann Judson Richards)の回想記(1911年)、アメリカン・ボードへの公式事業報告書である病院・看病婦学校第1～9年次報告書(4・5年次は未確認、1887～1896年)などから、開設初期の病院・看病婦学校では、新島襄の意向に沿って、キリスト教を基盤とした、欧米からの直輸入的ではあるけれども先進的で幅広い診療・看護教育が実践されてきたことを確認してきた(岡山、2010)。また、「佐伯の学校」となった後も、その精神は引き継がれ(遠藤・山根、1984)、卒業生たちの様々な活動記録などから看病婦学校の教育成果を探ってきた(岡山、2007)。

中でも、1901(明治34)年に京都看病婦学校同窓会の組織化に伴って定期的に発刊された京都看病婦学校同窓会機関誌には、その時々为学校の状況や卒業生の消息などが詳細に記載されており、卒業生による幅広い分野での活躍を確認することができる。この同窓会機関誌は、1901(明治34)年に第1巻1号として始まり、1943(昭和18)年の第5巻10号まで続き、43年間

で42冊が発刊された。同窓会機関誌の名称は、『おとづれ』、『助産之友』、『助産看護之友』と学校組織や運営、同窓会組織などにより変遷しているが、その時代に沿った看病婦学校の様子や卒業生の動向などを発信し続けた。

ここでは、この同窓会機関誌創刊から10年間発刊された『おとづれ』を概観し、その記述内容からその経緯や当時の看病婦学校、卒業生の状況などを、そして機関誌発刊の意義を探る。

## 1. 方法

主な史料は、同志社大学社史資料センター所蔵の「佐伯理一郎関係資料」にある京都看病婦学校同窓会機関誌『おとづれ』（以下、同窓会誌『おとづれ』）第1巻1号～第2巻10号の10冊を用いた。第1巻1号は1901(明治34)年1月、2号は同年5月、3号は1902(明治35)年6月、4号は1903(明治36)年10月、第2巻5号は1904(明治37)年8月、6号は1905(明治38)年9月、7号は1906(明治39)年8月、8号は1908(明治41)年11月、9号は1910(明治43)年1月、10号は1911(明治44)年12月に発刊されている。使用した同窓会誌『おとづれ』は、1998(平成10)年、京都看病婦学校・京都産婆学校の旧校舎が取り壊されるにあたって、佐伯氏のご親族から寄贈されたものである(本井, 1999)。本報告は、本史料の所蔵先の許可を得ている。なお、同窓会誌『おとづれ』第1巻1号～第2巻10号は同志社女子大学資料センターにも所蔵されている。

## 2. 京都看病婦学校同窓会発足と同窓会誌『おとづれ』の創刊

京都看病婦学校同窓会の正式な発足は1900(明治33)年秋、第1回卒業生輩出から12年後である。同窓会誌『おとづれ』第1巻1号(62頁)は、その発足の経緯が記述されている。

「我看病婦学校の同窓會なるものは其初め明治28年6月27日梶谷なか子不破ゆう子森田ひさ子等の發起にて一たび成立せしも其後立消となりたりこれ幾たびも學校の變遷ありたる故なり然に去る明治30年の春より今の佐

伯校長本校を管理せられてより基礎茲に定り又動く可くもあらず依て近年の卒業生等相會して同窓會再興の議をなすことしばしばなりしが、折よくも曩の教師フレザー氏はマニラより歸途我京都に立寄られたれば之を好機として愈々同窓會組織の談纏り茲に9月某日をトし其創立日再興會を催せり」

実際には、1900(明治33)年9月8日午後6時より、看病婦学校の2代目看護監督者で、すでにその職を辞していたH・フレザー(Helen Eliza Fraser)を迎え、約20名の出席者のもと同窓会総会が執り行われ、初代同窓会長には成瀬四壽子氏を選出、正式に同窓会が組織された。同窓会誌の発刊については、決議した同窓会規則の中で、

「第八条 同窓生相互の通信と學術及技藝の進歩を謀らんがため毎年1回雑誌おとづれを發兌し之を會員に配布す  
但しその編輯は幹事及び本校の職員に委託す可し」

と定めている(第1巻1号、64頁)。それを受けて、同窓会誌『おとづれ』第1巻1号が総会開催の約4ヶ月後に発刊された。その発刊の辞には、

「顧みれば明治二六年中『同志社病院おとづれ』生まれてより同二十八年には『同窓の音(おとづれ)』出でたりと雖も甲はベルリ氏歸國のため三四回にして、乙は學校變遷のため僅かに一回にして何れも其呼吸止むる不幸に會しぬ然るに今や幾多の艱難を經過して本校の基礎漸く堅く社會の信用又日々に熱く動かす可らず倒さんとして倒す可らず是よりいよいよ進んで我等の天職を全うし聊可本校の特色を顯わし以て國恩萬分の一に報んと欲し茲に新に同窓會を起し互に相切磋して且つ自らいさめんがため此一小雑誌を發兌するに至れりこれ我卒業生は多くは四方に散し會合甚だ容易にあらざればなり若し夫れ同窓の諸姉此雑誌に依りて互に相消息し又何事か之に依りて得る處あらば我等の望達したりと云

うべし」

とあり(第1巻1号, 1頁), 看病婦学校の基礎が安定し, 卒業生も増えてきたので, 過去に継続できなかった病院機関誌などを受け継ぎ, 同窓会発足を機に発刊に至ったことや卒業生の情報交換の場としての同窓会誌の意義を述べている。

### 3. 同窓会誌『おとづれ』の発刊

同窓会誌『おとづれ』は, 1901(明治34)~1911(明治44)年にほぼ毎年1冊発刊されている。サイズはいずれもA5判, 頁数は平均58頁, 最小23頁(第1巻2号)から最大は86頁(第2巻7号)と幅がある。同窓会誌『おとづれ』の名称や発行は, その表紙をみるとまず, 第1巻1~4号は「同志社病院・看病婦学校『おとづれ』(発行:同志社病院内京都看病婦学校同窓会)」、第2巻5~6号には「京都看病婦学校・京都産婆学校『おとづれ』(同志社病院内京都看病婦学校同窓会)」、そして第2巻7~10号は「京都看病婦学校・京都産婆学校『おとづれ』(佐伯病院内京都看病婦学校京都産婆学校同窓会)」と変遷している。表紙の上半分には英語

名があり, 第1巻1~6号は“The Messenger of Kioto Training School for Nurses in Doshisha Hospital”, 第2巻7号は“The Messenger of Kioto Training School for Nurses and Midwives in Kyoto Maternity Hospital”, 第2巻8~10号は“The Messenger of Kioto Training School for Nurses and Midwives in Saeki Hospital”となっている。また, 発刊の日付が西暦と和暦で記載されているが, 第1巻1号は西暦では1900年12月, 和暦では明治34年1月4日発刊と異なっており, 本稿では1901年1月とした(写真1)。

この名称や発行の変遷には, 看病婦学校や同志社病院の存続経過が背景にあった。同窓会誌『おとづれ』創刊時には, 佐伯が実質的な運営を担っていたが, 1906(明治39)年に同志社病院は閉院, 京都産院や佐伯病院での診療や看護教育とあわせて京都産婆学校(以下, 産婆学校)を運営, 両校からの卒業生を輩出した。その状況に沿って, 学校名や同窓会の名称などが変更された。

表紙の次頁には目次, 裏表紙には印刷・発行年月日, 編集者, 発行者, 発行所, 印刷所などがある。編集者は, 第1巻第1号~2巻第5号

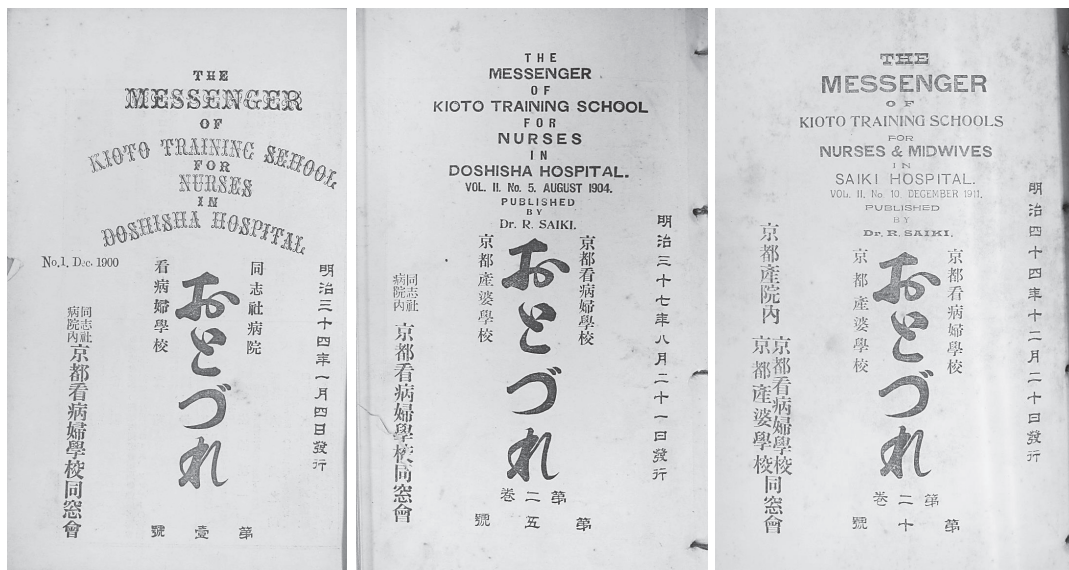


写真1 同窓会機関誌『おとづれ』第1巻1号(左)・第2巻5号(中)・第2巻第10号(右)の表紙

は佐伯、第2巻第6号は河村多喜也(当時、同志社病院教員)、第2巻7号は佐伯、第2巻8～10号は岩田とみ(京都看病婦学校第7回卒業生、当時、京都産婆学校教員)とあり、同窓会誌『おとづれ』の編集は、佐伯の意向が強く反映されていたと推測される。発行部数は各年度同窓会会計報告の中に、第1巻1～4号200冊、第2巻5・6号は250冊、7・8号350冊、9号400冊、10号450冊発刊とある。配布先は主に卒業生など、病院や看病婦学校に関係した人々である。

なお、同窓会誌『おとづれ』は、第1巻が1～5号、第2巻は6～10号となっている。その理由として、5号(62頁)の編集後記に、かつて同志社病院長であったJ・ベリー(John Cutting Berry)が発刊した病院機関誌『おとづれ』などを含めて第1巻として、京都産婆学校が明確に包含された5号から第2巻としたとある。

#### 4. 同窓会機関誌『おとづれ』の 主な記述内容

同窓会誌『おとづれ』各号の目次から主な記述内容を大別すると、「口絵」「学術・実験」「歴史」「雑録・雑報」「会報」「日誌抜粋」「従軍」「広告」などがある。

##### 1) 口絵など

第4回同窓会総会にて卒業時の写真掲載を決め(第1巻4号43頁)、第1巻4号からは看病婦学校・産婆学校卒業生、在校生、教職員や同窓生などの集合写真が、第2巻6・7号には日露戦争従軍の日本赤十字臨時救護班の写真もある。年度を経る毎に看病婦学校より産婆学校の卒業生や在校生数が多くなっていることが見受けられる。

##### 2) 学術・実験など

創刊号からはほぼ全てに学術・実験がある。[学術]では、佐伯の産科学論文、同志社病院・佐伯病院の医療統計、医師富士川游「知學的看護法」(第1巻1号12～18頁、2号3～5頁)、ドイツ人医師パウル・ヤコブソン「看病

婦技術の進歩」(第2巻7号1～20頁)、京都府立医学校教諭医学博士秋元隆次「分娩中に生ぜし臍帯の断裂」(第2巻9号1～4頁)、など、国内外の医学の先進的な情報を伝えている。

[実験]には、「双胎流産の一実験」(第1巻4号7～9頁)、「顔面産の一例」(第2巻9号7～9頁)、「羊水早漏の一例」(同14頁)など、佐伯や同志社病院・佐伯病院医師や同窓生による多くの事例報告がある。

##### 3) 看病婦学校・産婆学校・同志社病院の歴史

第1巻1号(19～37頁)、4号(25～39頁)には「京都看病婦学校略史」として、看病婦学校開設準備から同窓会誌創刊までの約30年間の足跡がある。設立経過をはじめ創立寄付金者の名簿一覧、入学生や卒業生の状況、病院・学校職員名など、詳細に述べられている。第1巻2号(5～7頁)には「京都産婆学校略史」として、1895(明治28)年に佐伯病院内に設立した産婆講習所を2年後に同志社病院に移した経過、卒業生の状況、中でも看病婦学校卒業生で産婆試験合格者がいることなどが説明されている。第1巻1号(36～38頁)には「同志社病院略史」があり、開院準備から後の状況、開院3年間の患者統計表などがある。

##### 4) 病院・学校の雑録・雑報

(1) 第1巻1号(49～61頁)には、同志社病院の近況、患者心得、施療心得、看病婦学校と産婆学校の近況、両校の学校規則、看病婦学校西洋按摩生徒規則、看病婦被雇規則、京都産院の施療などがある。その後も各号に、学生や教職員の動向や建物の増改築など、それぞれの近況を記述しており、いずれの時もおおよそ静穏とある。また、第2巻9号(20～27頁)には、看病婦学校の科目改正の詳細な記述があり、それによると2年生に助産学の科目が大幅に増えており、当時の学校卒業時の看病婦と産婆試験の受験に対応したものと推測される。産婆学校は1年制で産婆資格を、看病婦学校は2年制で看病婦と産婆の両資格を取得できたようである。ま



た、1903(明治36)年には看病婦学校にも1年制(別科)が始まり、2年制の方は正科となる。日露戦争中には臨時的に看病婦を養成、従軍したとあり、看病婦別科の開始は戦争のための需要に対応するためと推測される。

(2) ほぼ全号に、看病婦学校・産婆学校卒業式の状況が記述されている。卒業礼拝、送辞・答辞、祝辞の内容、卒業生名簿などがある。第1巻4号(41頁)には両校卒業生のための誓約が示されており、合同での卒業式の様子がうかがえる。

### 5) 看病婦学校同窓会の会報

(1) 第1巻1号(62~65頁)には、看病婦学校同窓会発足の経緯、1900(明治33)年開催の設立総会の様子、同窓会規則がある。その後、各号にその年度の総会議事録、会計報告がある。卒業生寄附金収支関係も詳しく記述、会計報告には年会費未払者名簿もあり、会費徴収には積極的であった。同窓会長は初代成瀬四壽子(8期生)、二代目東達(9期生)、三代目不破ゆう(2期生)が選出されたこと、毎年の会員動静、会員からの便りなど多数がある。

(2) 会員名簿には、第1巻3号から毎年、卒業年度順に卒業生の氏名・住所・現職など詳しい記述がある。あわせて、同窓生の消息、寄書・忠言など卒業生からのメッセージもある。第2巻10号(43~63頁)の名簿の最後に、看病婦は正科162名、別科31名、産婆408名、実習生10名、マッサージ22名、総合計680名(内死亡40名)とある。看病婦学校卒業生は別科を含め、創立から35年間で193名であることがわかる。

(3) 第1巻4号(49頁)に「本校存廃問題」、第2巻6号(29~48頁)には「本校の前途(廢校問題)」、7号(22~38頁)は「母校存廃大問題の顛末」、8号(1~20頁)では「母校維持問題(母校の其後)」と同志社病院・看病婦学校存続問題を大きく取り上げ、母校存続に向けて、当時の会長不破ゆうを中心に同窓会一丸となって対応した状況の詳細な記述がある。同志社理事会による同志社病院閉鎖・看病婦学校廃止の方向

に対して、1905(明治38)年7月同窓会は臨時総会にて反対活動を開始、存続のための募金活動や同志社への嘆願書提出、看病婦学校理事会の組織化とその活動などを進めたが、結局1906(明治39)年には同志社病院は閉鎖、同年4月30日には看病婦学校が佐伯病院内に移転したとある。8号(4~6頁)には「現在の母校」、10号(37頁)には「学校の京都産院への移転」の記述があり、移転後は佐伯を校長として、教育環境などを整え、学校運営・教育をすすめようとした様子がうかがえたが、看病婦養成には施設などが不十分であるということで、佐伯は生徒募集停止の意向を表明していた。実際には、入学志望者が後を絶たなかったため停止には至らなかったとある。

### 6) 日誌抜粋(佐伯による)

第1号3号(18~20頁)、4号(45~48頁)、5号(40~42頁)、6号(14~15頁)には1902(明治35)年4月から1905(明治38)年7月の佐伯のものと思われる日誌抜粋の詳細な記述がある。学校の入学式や卒業式、始業・終業、卒業試験、産婆試験、卒業生の動静、学校への来校者、教職員の異動など、佐伯の目から見た学校の日常的な様子がうかがえる。

### 7) 日露戦争への従軍

第2巻6号(15~29頁)、7号(43~56頁)には、当時勃発した日露戦争への同窓生の従軍についての記述がある。それによると、開戦以来同窓生の多くが救護員としての従軍を希望している中で、赤十字社東京本社から救護班組織の依頼があった。そのため、直ちに同窓生に呼びかけ、36名が応募、早速第32・33救護班の2班を編成、救護員として派遣したとある。その後も救護班への志願者は増え、総数で50名を越えている。また、派遣の同窓生からは「日誌抜粋」として、派遣先での状況を詳しい報告がある。配属先は、負傷者を輸送する病院船が多い。

## 8) その他

第1巻4号(12~13頁)には同窓生に最新の診療・看護の知識を提供するための「産婆及看護技術講習会」の開始、第2巻7号(76頁)には「京都助産学会」の設立など、広く看護や助産を普及しようとする動きの記述がある。同号(77~82頁)に同窓生の派出看護組織である「京都同志看病婦会」の設置、その規則や規定がある。また、第2巻5号(37~38頁)には佐伯夫人たちが「京都産院婦人同情会」を組織し、寄付などによる生活困窮者の出産への経済的支援を開始したとある。その他に、学校の生徒募集、同窓会開催の案内、編集係からの原稿募集、佐伯病院などの診療時間、佐伯氏の著書案内など多様な広告がある。

## 5. 同窓会誌『おとづれ』発刊の意義

同窓会誌『おとづれ』の記述から、1901(明治34)~1911(明治44)年の看病婦学校、同志社病院などの状況を概観すると、まさに大転換の時期であったといえる。1886(明治19)年に同志社のもとで開設された看病婦学校は、その約20年後にはその手を離れ、佐伯を管理者として、佐伯病院・京都産院にて看病婦学校・産婆学校の両輪での教育と、新たな道を歩き始めた。卒業式での、卒業生による誓約(第1巻4号、41頁)はその象徴である。この激動の中で、その中心にいた佐伯は、教職員の確保をはじめ教育環境の整備など、学校運営を積極的に進め、キリスト教に基づいた、質の高い看護教育を維持しようと尽力していたことがうかがえる。

一方、看病婦学校存続の動きに対して、卒業生の力を結集して、その存続を訴えたのが、看病婦学校同窓会の大きな活動の足跡であった。その活動を克明に報告、記録に残したのが同窓会誌『おとづれ』である。

ここで、この同窓会誌『おとづれ』発刊の意義について改めて考えると、まず、同窓会の創設とともに全国の卒業生へ、母校の状況や卒業生の動向、医療・看護の新しい情報などの発信を通して、母校の単なる広報誌という意味だけ

でなく、卒業生からのメッセージやその動向を知らせ合う交流的な役割を担っていたと思われる。また、在校生にとって卒業生の様々な活躍を知ることで、自己の将来像を描くことができたのではないとも考えられる。また、看病婦学校存続の動向と同様に、日露戦争への従軍に関する内容は、かなり詳細で具体的で、同窓生たちが社会的な要請に応じて活躍している姿を大きく映し出している。

そして、随時同窓生の住所を把握しているため、同窓会誌『おとづれ』を通して、同窓生に母校の現状をいち早く発信し、必要時、母校への支援を求め、同窓生もそれに即応できたと思われる。その代表的な例として、母校存続の動向の中で、その時々状況を発信、同窓会長を中心に一丸となって母校存続のために積極的な活動を進め、その状況を見極めてきたことは、同窓会としての大きな役割を果たしたことが挙げられる。あわせて、同窓会誌『おとづれ』が母校と同窓生を繋ぐ重要な媒体であったと考えられる。

さらに、各号の同窓会誌冒頭には、学術的な医学・看護の論文、卒業生による助産・看護の事例紹介などにページを多く割り、あわせて、産婆及看護技術講習会や京都助産学会の活動報告など、看護・助産の専門的なアップデートな情報を提供したり、同窓生に対して事例報告の機会を提供するなど、卒後の教育を推進する場でもあったと思われる。

## おわりに

看病婦学校での教育開始から約7年後、J.ベリーの主導による同志社病院機関誌『おとづれ』が発刊された(岡山, 2017)。佐伯は、後に、同窓会誌『おとづれ』(第1巻1号、28~29頁)の中で病院機関誌発刊の前年は過去だけでなく将来においても、同志社病院・看病婦学校の全盛時代であったと評価し、機関誌の発刊はその発展を助けるものであると述べている。それから8年後、看病婦学校同窓会設立と共に同窓会誌『おとづれ』が発刊された。同窓会誌の主た

る編集者であった佐伯は、看病婦学校の今までの功績を思い、病院機関誌と看病婦学校同窓会誌の発刊を1つの流れと考え、これからの発展を祈念していたのかもしれない。看病婦学校が、同志社から佐伯の手に引き継がれるという大転換の時期、この同窓会誌には、佐伯や同窓生たちの目線で、転換という現実には何とか立ち向かいながら、粛々と教育を進めていく看病婦学校の姿、そして同窓生たちが社会情勢に対応しながら幅広く活躍する姿が映し出されている。その意味でも、同窓会誌『おとづれ』は、看病婦学校の動向や教育成果の一端を知る貴重な史料であるといえる。

なお、同窓会の発足から10年が経過した時、看病婦学校が基本的に2年制、産婆学校は1年制であったため、卒業生数は産婆学校の方がかなり上回ってきたことに加え、看病婦学校でも助産教育を強化し、看護資格と同時に産婆資格を得る卒業生が増加したなど、看病婦学校同窓会の枠だけでは収拾しきれない状況になってきたため、産婆学校同窓会に引き継がれ、同窓会誌も『助産之友』として姿を変えていくこととなる。

謝辞：本論をまとめるにあたり、長年共に研究をすすめ、ご助言頂きました依田和美先生、竹中京子先生に深く感謝申し上げます。尚、本研究に関して著者は開示すべき利益相反はありません。

## 文献

- 遠藤恵美子, 山根信子(1984): 佐伯の学校の卒業生たち～京都看病婦学校・京都産婆学校～. 125-165. 東京: 非売品.
- 本井康博(1999): 佐伯理一郎と内村鑑三『佐伯理一郎・小糸関係資料』. 同志社談叢. 19: 123-144.
- 岡山寧子(2017): The Doshisha Hospital Messenger 京都同志社病院機関誌『おとづれ』～第1-3号(1893年)の記述内容～. 同志社看護. In press.
- 岡山寧子(2010): 同志社病院・京都看病婦学校ではじめられた看護教育～リンダ・リチャーズの日本での活動から～. 京都府立医大雑誌. 119(2): 88-98.
- 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美(2007): 京都看病婦学校初期の卒業生の看護活動を紹介した文献. 第27回日本看護科学学会学術集会講演集: 356.
- 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美(2008): 同窓会誌『おとづれ』からみた京都看病婦学校卒業生の活動～第1巻1号から第2巻10号(明治34年-44年)の概要～. 日本看護歴史学会第22回学術集会講演集: 50-51.
- 寺崎暹(2002): 京都看病婦学校と佐伯理一郎～宗教活動の視点から～. 新島研究. 93: 3-48.
- 寺崎暹(2003): 京都看病婦学校と佐伯理一郎～宗教活動の視点から(二)～佐伯理一郎の足跡と業績. 新島研究. 93: 3-48. 116-151.